大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ぷらっとシネマ　現実と寓意のあいだをゆく怪作『瞳は静かに』（D・ブスタマンテ監督）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017152

ぷらっとシネマ　　萩原弘子

現実と寓意のあいだをゆく怪作
『瞳は静かに』（D・ブスタマンテ監督）

８歳の少年アンドレスは、兄と母ノラの３人暮らし。父はいつもなにかに苛立ち、怒鳴っている人だった。両親が離婚し、アンドレスは毎日父と顔を合わせることはなくなった。ただ気にかかるのは、頻繁に母を訪ねてくる近所の青年アルフレドの存在だ。２人は何を話しているのか。アルフレドは母の何なのか。

アンドレスと兄は、同じ街に住む父方の祖母の家をよく訪れる。おやつを呉れる祖母に学校の話を聞いてもらう。祖母の家事を手伝うこともある。

ある日、母ノラが勤務する病院に重傷を負った女性が運びこまれる。瀕死の女性の願いを聞いて、急ぎ公衆電話に走るノラ。電話はかからない。次の瞬間、突進してきた車に轢かれてノラは死んでしまう。大好きな母との生活が突然終わる。まだ幼い兄弟は、祖母の家で暮らすことになる。口やかましい父が再びアンドレスの生活に入りこんでくる。祖母にも警戒心を抱くようになる。

アルフレドから、母に貸した本の在りかを尋ねられたアンドレスは、母の死に疑念を募らせる。その本は母の死と関係があるのか。母は何をしていたのか。なぜ死んでしまったのか。８歳の少年の瞳が捉える真実とは何か。

1976～78年のアルゼンチンという特定の時代、社会を少年アンドレスの眼を通して描いた作品だ。数年前の 1973 年、亡命から帰国して３度めの大統領就任を果たしたペロンは、翌年あっけなく病死してしまう。長い亡命生活の後に高齢で就任したペロンの社会民主主義的政策は当初から破綻していた。亡夫の遺志を継いで大統領となった妻イザベルの政治力ではどうにもならない。そんななかで1976年、ビデラ将軍がクーデタで政権奪取。ビデラは周辺国の軍事政権と結託し、アメリカの支援を得て「汚い戦争」を始める。

おそらくノラとアルフレドは、軍事政権に反対する政治運動に関わっていたのだろう。軍事政権による「汚い戦争」は誘拐、監禁、拷問、殺害などで人々を怯えさせ、反対勢力を抑えこもうとするものだった。失踪したきり、戻らなかった者は多い。映画『オフィシャル・ストーリー』（1985年）は、まだ民政移管したばかりの 1983 年に、養母として娘を育ててきた女性が娘の出自に疑問を抱く物語だ。娘が、軍事政権に殺害された政治活動家の子どもだとつきとめた彼女は、政府高官である夫の醜い暗部に迫っていく。主人公を演じたＮ・アレアンドロは、アルゼンチンを代表する女優で、軍事政権時代には映画出演を拒否していた。そのアレアンドロが本作で祖母を演じている。

この祖母がただ者でない。最初はアンドレスの話を聞いてくれる優しい存在と見えるが、やがてアンドレスの不信の対象となる。最後には驚愕の結末が待っていて、そこで初めて本作が単純な社会派ヒューマン・ドラマではない非凡な怪作だとわかる。詳細は書かないでおこう。映画は現実と寓意の比率が 10：０で始まり、最後には寓意率を高めて１：９ほどになって、観客を驚かす。しかし観終わってからふりかえれば、実は最初から1970 年代アルゼンチンの壮大な寓意的物語であったようにも思える。アレアンドロ演じる祖母が、孫をもつ高齢女性のステロタイプに収まらないのは、彼女がアルゼンチン現代史の何かの寓意だからだろう。

スペイン語の原題「アンドレスは昼寝したくない。」は、子どもを叱るときの言葉から来ている。「大人の話に口出しするな、昼寝してなさい。」と叱ってくる大人の言うことなど聞いてはいられない。寓意性の高い作品であることがわかると、この原題の深い意味も見えてくる。社会の未来をつくるのは昼寝を拒否する子どもである。

本誌 27 号（2011 年春）の本欄で評した『マチュカ―僕らと革命』（2004 年）は 1973 年チリのピノチェット・クーデタに関する作品だ。1970 年代ラテン・アメリカの革命と反革命を描いた作品としては他に『ミッシング』（1982 年）、『死と処女』（1995 年）などが日本公開されている。1970 年代、20 代の私は昼寝中で、ラテン・アメリカは遠かった。当時関心を向けていた問題群は、韓国の軍事政権、日韓政財界の「癒着」、韓国政治犯、大村収容所などだった。いま思えば、それらは同時代のラテン・アメリカの問題群と同じ根から発していた。1970 年代に不寛容で非民主的な政権が第３世界に多かったのは偶然ではない。問題は世界規模であり、その不気味な世界的同時代性を表現するには、リアリズムより寓意が適しているかもしれない。

（アルゼンチン、2009 年、108 分）